

都道府県別賞一等

グッドアシスト

岡山県 岡山市立吉備中学校 三学年

山下 智帆

あの冬の出来事は、冬が来る度、家族で話題になり、両親は少し遠い目をしながら、しんみりします。

私が幼稚園の年長の時、小学四年生だった兄はインフルエンザにかかりました。母は近くの診療所を受診させ、兄は自宅で療養することになりました。

兄はよくインフルエンザに罹患してしまうのですが、薬を服用し、安静にしていれば、熱も下がり、じきに体調も良くなります。しかしその年は様子が違っていました。息遣いが荒々しく、顔は真っ赤に紅潮し、何と、見えるはずのない、母の発言した言葉が整列している、と興奮気味に騒ぎ立てていました。母は

「もう分かったから、布団に入って休みなさい。」
と声を掛け、横になるよう促しました。

しばらくして、兄の様子を見に行った母から、悲鳴のような、兄の名を叫ぶ声がしました。叫び声を聞いて飛んで来た父と私が見たものは、全身をガタガタと震わせ、呼吸が自分で上手く出来ずに苦しそうにし、顔が紫色で、カッと目を見開いている兄の姿でした。両親は大声で兄の名を呼び、父は母にすぐに救急車を呼ぶよう指示しました。泣きながら、半ばパニック状態で母は要請の電話をし、まだ幼かった私も、兄の様子と両親の鬼気迫る雰囲気には怯え、ずっと大泣きしていました。

救急車が到着し、兄は搬送され、母も救急車に同乗して付き添いました。その晩、私は何度も泣いて起きたそうです。そのくらい、家族が病気で大変な状態にある、ということは幼かった私にもかなりショックだったのでしょう。

救急隊の方の迅速な処置、病院の先生方のお陰で、呼びかけに応えなかった兄の意識がはっきりしだし、日付が変わる頃には、受け応えができるまでに回復しました。

「念の為、しばらく入院しましょう。ですが、相部屋が一杯で、個室の特別室しか空いていません。少し、お値段がかかりますが、宜しいですか……？」と少し申し訳なさそうに看護士さんに言われた母は、正直、一瞬、金銭面で不安になったそうですが、兄の為、いつ退院できるか分からない不安も抑え込んで、

「はい。宜しくお願いします。」

第60回中学生作文コンクール

と答えたそうです。

すっかり元氣を取り戻し、病院食が美味しいとはしゃぐ兄を尻目に、母は、支払いがクレジットカードが使えるのか、総額はいくらだろうか、と一人不安になったそうです。

自宅に取り残された私と父ですが、父は慣れないお弁当作りや、私の世話でクタクタになったようです。

突然の兄の入院で日常が一気に壊れた我が家でしたが、兄もすぐに退院でき、母が不安に思っていた支払いは、全て父が家族の為に掛けてくれていた生命保険で賄えたそうです。あの時ほど、生命保険に入っていて良かったと思ったことはないそうです。有事の時には、目の前の問題に向き合うことで精一杯で、お金のことを考える余裕なんてないからだそうです。「頭では分かっていたつもりだったけれど、自分が体験してみても、保険の有難味が良く分かった」と母は言います。

ありふれたいつもの日常を何気なく見守り、いざという時に助けてくれる、生命保険とはそんなグッドアシストのできる、頼もしい存在だと私は考えます。普段は気に留めない存在ですが、有事には大いに力を発揮してくれます。私も将来、社会人になった時、家族を持った時、様々なシーンでグッドアシストが受けられるよう、どんな保険があり、自分に必要な保険は何か考え、学んできたいです。